

氏 名	谷内 春子
学 位 の 種 類	博士（美術）
学 位 記 番 号	第 72 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	〈景〉の表現の可能性について -複合的な風景表現の考察-
審 査 委 員	主査 教 授 綾田 勝義 教 授 田島 達也 准教授 小島 徳朗 教 授 西田 眞人 下村 泰史（京都造形芸術大学教授）

論 文 の 要 旨

「風景」を描いていたら、「風景画」と呼ばれる。この論文は、「風景画」の語に付随するイメージに対する違和感から、「景」という言葉を持ちだし、それを自分自身の表現する内容を語る言葉として位置づけようとしてきたものである。そして最終的に東洋的な風景表現という大きな枠組をも示唆するものとして意識することに至るものであった。

本論ではまず、なぜ「景」という言葉を選ぶのかについて考察している。そのなかで、「風景」が場所との結びつきを感じさせる一方、「景」が中性的な意味にとどまっていることから、私自身の考える風景表現をさす言葉を〈景〉としてとらえなおしたいと述べている。その〈景〉には、「風景」の要素である個々のものを統合していくという過程に重きをおいているということ、そして、個々のものには、さまざまな具体性を見立てるといことも〈景〉に託そうとした意味であった。

そして次に「風景画」に対する違和感の背景や可能性を考察していく。19世紀の西欧における「風景画」に対して、明治の日本の画家達の思想の変化や風景表現を考察するなかで、「風景画」とは異なる風景表現の存在について問題意識をもつこととなり、そのベースとなるやまと絵について考察を行った。このやまと絵における風景表現の考察から、〈景〉のありかたは、そのパーツを組み合わせ再構成する方法と共通することを再確認することとなる。それはアルベルティの『絵画論』にみられるような、描きたいものを、四角の枠を通して透かし見る「窓」としての絵画空間とは異なるものだったのである。パーツを組み合わせる場合には、画面には具体性をもてない部分が存在するが、遠近法的な整合性を求めていることによって、それとは別の感覚によって組み立てるという意識が働いていたことを示していた。

このような画面空間においては、関係によってその空間の捉え方が変動し、画面の印象を深めるという意識が働いていた。たとえば《浜松図》では、画面はまるで舞台の役割であるかのように、それぞれのものは個々に存在し、物語的なつながりを有しながら、曖昧な空間性を金の雲や海によって調和させていた。そし

て同時に複雑な形や色が絡み合うことによって画面空間の印象を強めていたといえる。また、《日月山水図》の画面は、絵巻的な風景のパーツが組み合わされ、個々のパーツの関係によって、より大きな空間性、そして時という概念までも含めた世界観を表し、またパーツの間に様々な技法や物質感を入れ込むことで、それらを不可思議な（面白味のある）空間として印象づけている。つまり、描かれたもの（パーツ）は、それぞれに空間を共有しながら存在し、まるで伸び縮みするものとして画面空間をとらえており、それを造形的な印象づけによって統一させていたのである。

また、パーツの使用は、庭における「景石」「借景」という使用される技法とも共通するといえる。そして、パーツは、白砂や池、露地などによって繋がっており、これらの存在によって視線が誘導され、パーツが焦点として印象づけられていた。ときにそれは、遠近感を調整し、造形的に強調するための装置でもあり、このことはやまと絵における金雲や山の役割と類似しているといえるだろう。

つまり〈景〉とは、パーツによって構成される複合的な風景表現の一つであり、また、その画面空間の捉え方は、具体的な遠近法的空間としての精密さとは異なる造形的な印象づけを意識した伸縮自在な捉え方によって構成されている特徴をもつものであったのである。けれども、やまと絵や庭においては、パーツやその組み合わせが、具体的な意味と密接に結びついており、それが絵画空間を支える根拠となっていた。私の制作においては、このような伝統的な意味を示そうとしているわけではない。

そこで次に自身の作品と〈景〉の考察として、〈景〉表現の手法の整理やその構造を分析し、私の〈景〉表現の試行を考察することで、その特徴やパーツの再構成を規定するものが何かについて省察した。そのなかで、私の〈景〉表現は、パーツ化による再構成と色による表現（色彩・ブレ・曖昧な空間性・ズレ・異質さによる緊張感）の重要性、そしてそれらすべてが画面空間と実空間を行き来する感覚の実現に帰結する試みであったことを確認する。それを展開して考えるとき、その感覚の実現は、画面とそれを見る者の存在感の強調であり、「存在感に対する問いかけ」としての意味をもっているといえる。それはいわば、日本画はもとより絵画全般がさまざまな様相をみせる現代において、私の試行する〈景〉の課題といえるだろう。

〈景〉とはパーツによって構成される複合的な風景表現であり、私が〈景〉として名付けた表現は、大きな意味では、東洋的な風景表現の枠に当てはまるものであった。

これらに対して、現代に生きる私の〈景〉表現として、東洋的な風景表現の系譜にのっとりながら、異なる基準や課題をもって独自の表現を模索しているものと、位置づけたい。

つまり私の〈景〉は次のようなものである。造形的な印象づけを意識した単純な形態をもちいて、それが色による表現性に依っているという特徴をもつ。それは、見立てというものが示すように、具象性に寄り添うような色ではなく、むしろ色に具象性が寄り添うという色の役割と、その発色操作（ブレ・ズレ）が私の〈景〉表現で重要な役割を果たしていたことを示していた。さらにそれらは最終的に画面空間と実空間を行き来する感覚によって規律されるものであった。そのような〈景〉の表現の展開の模索として、様々な試みがされていたのである。

審査結果の要旨

日本画領域 谷内春子氏の博士（後期）課程本審査提出論文は「〈景〉の表現の可能性について―複合的な風景表現の考察―」と題し、〈景〉と名付けた自らの風景表現について多角的に考察している。

論文の出発点は、「風景画」という言葉にあった。風景を描いている谷内氏の作品は風景画と呼ばれる。しかし氏自身はそこに違和感を感じたという。自分の作画過程や目指す表現が、「風景画」という言葉がもつ一般的なイメージ（田園風景のようなノスタルジックな情景や、著名な自然景観のイメージなど）とはズレがあると考え、それが何に起因するのか、というところから研究に着手した。まず「風景」に類する言葉、けしき、光景、景観などの言葉の概念を検討し、それらとの比較の中で「風景」という単語の持つ特有の意味を明確化した。次に「風景画」について西洋、東洋、日本の美術を概観し、谷内氏が一般的な「風景画」と感じていたイメージの成立と、そうではない表現の系譜を見出していく。谷内氏を目指すものはパーツの配置と伸縮自在の空間構成によるもので、それは庭園ややまと絵に顕著に見られる表現方法であるが、一般的な概念として確立していないためあえて〈景〉と名付けた。こうして〈景〉の概念を明確化したうえで、改めて自らの作品を分析し、また制作の指針としていく過程が記述されている。

この論文には、制作上生じた疑問→問題点の明確化→考察→解決そして作品制作への適用という一連の流れが明確に示されており、実技系の論文として理想的な形となっていることをまず評価したい。

内容面では、西洋的な風景画とそれがもたらされる近代以前の山水図や名所絵などとの違いは、従来の美術史においてもさまざまな視点から指摘されるところである。谷内氏の言う〈景〉が指すものは、庭園、古代の絵画、近代の絵画、そして谷内氏自身の絵画まで幅広いため、様式論的には多少曖昧な部分があるのは否定できない。しかし谷内氏の分析は、実作者の視点からなされたところに意義があり、とりわけ、今日の絵画として日本画に取り組んでいる人々には多くの示唆を与えるものと思われる。この論文に関して、一般的な問題と個人的な問題をうまく引き合わせながら破たんなく書かれ、制作の実践の中で谷内氏が発見した、絵具の効果による「ブレ・ズレ」という新しい観点が組み込まれ、さらにそれが「画面空間と現実空間の身体的な感覚の行き来」を生み「存在の所在への問いかけ」につながるという新たな考察を付け加えることで独自の論点を獲得し、論文前半部分の風景表現について多角的な考察と併せて、一定の到達点を見ることが出来たのではないかと評価できる。

作品制作については、谷内氏の作品は、〈景〉の風景表現としての考察実験作品といえるものである。水景/ 風・風・留は 150 号のパネル作品を 3 点つなげ並べた作品であるが、谷内氏の述べる伸縮自在な空間表現の要素の発展として色と形の転換・色のパーツ化を試行した作品ある。湖の楕円が並び、また個々の楕円の中にも何重にも円が重なり、また日本画絵具の特質としての発色の膨張性の微妙な変化を操作して論文で述べている「発色のズレ、ブレ」を試行して、造形的な印象づけと空間感覚の誘導と拡張が感じられる。これらの試行は見る物の感覚が主体と画面を行き来する感覚が生み出され、大画面として伸縮自在な空間が体感される、谷内氏独自の風景空間を表現している

と言える。また杲杲の作品は、屏風仕立てに展示している。これも論文で述べる画面空間と展示されている実空間の間を感覚が行き来することの試行で画面中の 2 次元空間が 3 次的に体感されダイナミックな空間演出になった。〈景〉の空間表現の可能性について、描かれた画面空間から鑑賞者を含めたその場、環境にまで広がる表現の可能性を示し、論文のまとめとして〈景〉表現の基準となるものは、「自己の存在感の所在への問いかけ」と述べているが、これらの空間体験から氏の到達した結論は理解できるものである。論文で整理したことのみが目的として作品が出来上がるのであれば、大方の場合、おそらく論文とは反比例して作品は希薄化していくことになるのではないだろうか。あくまで可能性の整理と現時点での解釈として論考がなされていること、また、未来ではなくあくまで過去のものとしての作品に対しての整理として論考がなされていることを前提として制作を見る必要がある。制作者としては言葉よりも常に制作が先に進んでいる状態を維持するべきである。その意味では、谷内氏の制作と論考の関係は健全なものの範囲内に入るのではないかと思われる。描かれたものを懸命に解きほぐし論考によって理解しようとする姿勢を貫いたことを大いに評価したい。

以上の論文と作品制作に出された評価も踏まえ谷内春子氏の博士論文、ならびに作品は本学博士課程の学位水準に達しているものとして審査委員 6 人全員一致した判定で合格とした。